

復員後、休職になっていた四国電力に復職した。全県で患ったマラリヤのため、帰ってから一年ぐらいは悪寒と高熱のため苦しんで、肝臓も悪くなった。連隊長の「羅患証明書」は今でも持っている。それが私の「戦いへ行った証拠」ということです。

中支で兵役免除、難病を克服して

広島県 村上秋義

―村上さんは何処で生れ、何年徴集兵ですか。また勤務地は大陸だそうですか。

私は大正七年十一月六日、因島で生れたのですが、昭和十三年徴集兵で、兵隊検査では甲種合格でした。昭和十四年五月一日、現役兵で福山の歩兵第四十一連隊補充隊へ入営しました。一期の教育の時から大隊砲(九二式)専門でした。

一期検閲後、第三十九師団(藤兵団)の歩兵第二三一連隊に転属し第三大隊要員となりました。八月四日

に編成が終わったと記憶しています。

昭和十四年十月九日、宇品港出発。十月十一日揚子江を遡行し、十九日に漢口に上陸しました。二十六日には漢口から孝感まで徒歩で行軍です。戦地だから戦争かと思ったら先ず行軍だったので。

私の所属の第三大隊は後方の警備で、第一、第二大隊は孝感地域の最前線でしたので、第三大隊は宣撫工作や討伐の応援などに行ったのです。連隊本部は孝感にあった。

―戦地での教育訓練はどうでしたか。

訓練はなく、直ちに実戦だった。昼間は警備、住民の良民証の点検、夜は警備で歩哨に立った。歩哨は壕の中でないと狙撃されるので、耳と眼だけを出していた。情報では「歩哨が射られた」など時があった。

今言ったとおり、孝感では主要道路警備、宣撫などの連続で、休む暇もない。なにしろ戦争に来ているので、当たり前と思いきいとは思っていなかったが、楽しみは寝るだけだった。

冬期作戦に参加したが、雪の中の行軍で、野営は民

家に入るのだが、サソリが多く、脱いだ靴の中に入っていたり、壁にもたれて寝るなど注意されていた。

日時は良く記憶していないが、作戦に参加したが相長い期間だった。敵の司令官張自忠を戦死させたが、この時はこれが本当の戦争だと思った。野砲をバンバン射つたりして激しい戦いだったが、聞くところによると張自忠將軍を敵兵が人間ぶすまで囲んで守ったというが、射たれて戦死したという。

この戦いでは戦車、飛行機が参加、我々大隊砲は河を隔てて射った。歩兵は市内へ突入したが、野砲や歩兵砲は河の手前での戦闘だ。掃討戦は第一、第二大隊だったと思う。その戦闘で、私の戦友で体格の大きな男だったのに戦死され、茶毘に付し、佐々木という同年兵が僧侶でお経をあげたのを記憶している。

—その後、宜昌作戦に参加されたというが相当激しかったのでは。

戦闘も大変なのだが、その前に馬の苦勞を一寸話したい。私は瀬戸内海の因島育ちだから馬を見たことがない。本州の者は馬に馴れていたが、私は大隊砲だか

ら馬が要る。初年兵の時、馬の蹄鉄を洗う時、馬の足をかかえると馬がいやがる。おとなしいのもあるが、暴れて手に負えないのもある。

そのうちに、私は砲手になり、馬の手入れをするより砲手で良かった。馬持ちは馬の手入れで自分の食事も出来ない。馬も大変だが、馬持ちも大変、人馬一体の言葉通りで、馬様々です。何しろ、馬は兵隊の何人も働くのだから。

宜昌作戦のことだが、師団司令部は荆門に進出した。作戦参加の大隊砲は第三大隊の我々の一門が先に行つた。元気な者は着いて来いと、約三時間ぐらい走つた。道路が切断され、鋸の歯のようになっていたので、砲を分解したり、搬送したり、それを組み立てて射撃する。脚を一本宛担ぐ。砲身は一人だ。次々と交代しながら走つた。道が平坦になれば駄載したりで目まぐるしいことだ。我々の後続の砲も同様にしてようやく追いついて来た。

宜昌を占領し、そこで警備体勢に入ったが、私はリンパ腺がはれ、荆門に後送、第三十九師団第一野戦病

院に入院させられた。その後三カ所ぐらい転々として南京まで下った。南京で初めて俸給を貰い、兵站酒保へ初めて行った。

昭和十五年十二月、診察を受けたが、カルテには何も書いてない。只④の印が押してある。衛生兵が「お前内地還送だ」と言われた。気持ちはうれしいやら、情けないやら複雑な気持ちだった。

広島島の陸軍病院に入ったが、室長をやらされ、看護婦の手伝いなど、支那からの負傷兵の手伝いもしていた。私は診断の結果が出て、直ぐ手術をした。肺結核兼脛部リンパ腺炎となっていて、結核病棟へ隔離されたり、消毒されたりで大変だった。

私は「結核か、いよいよ死ぬのか、不治の病だらしいことになった。これなら戦地で死ぬば良かった。ここでは死場所が悪い」と思った。母が面会に来て「なおるから」と言われて力を付けられたが。その後「公務起因、兵役免除」となった。

病院では「七項症」の見込んだったが、恩給局では「有期第二款症」とされた。家でゴロゴロしていたら「腹

膜炎」を再発し、西条の傷痍軍人療養所の重症病棟に入れられた。

甥も医者、同級生も医者だったし、最近靖国神社で戦友会で戦友に会ったが、皆「良く結核がなおったなあ」と驚いている。

昭和二十年三月、警察官として社会復帰し、竹原警察署へ勤務した。

八月、例の広島原爆となるのだが、竹原消防団員と共に現場へ警察官として十五日まで救助に行った。二三日でも原爆症となった者もいるのに、私は「良くならなかったな」と言われた。当時、警察には若い者がおらず、ずっと勤務しなければならなかった。消防団は代わる代わる勤務出来たのに、私は六日―十五日まで一人で作っていた。

―兵役免除になったのに、今度は原爆ということですが、その時の様子を話して下さい。

原爆の投下は八月六日午前八時十五分、私たちは午後四時過ぎ市内に入りました。駅の方は大火災で炎上。町内もあちこちで火災の煙が上がり、家屋の倒壊、被

災者の哀れな服装、雑踏往来をみて、悲壮な思いでした。

早速本部へ竹原署から応援の旨の報告命令指示を仰ぐべく出張した。私たちは東練兵場に野営。夜遅くまで被災者や市民が右往左往し不気味でした。

翌日「市内の死体収容と道路確保」の命令で団員と共に屍体を戸板に載せて運んだ。検死調書を作り苦労した。

電車通りから路地にいたるまで手当たりしだい路上の材木、カケラを整理した。時間が経つにつれ家屋の下敷きから臭気がするところを時間かけて払い除け、下からたくさん屍体を収容した。

なかには腐敗し、顔も身体もふくれて特徴や年齢が判明しにくいものもあった。炎暑の中、良く頑張ったと思う。八月十五日夕、帰署した。

直ぐ進駐軍が呉に上陸するので、進駐軍を逆に警備するため十日ぐらい勤務したと記憶する。

昭和二十四年退職し、会社に入社したが、今度は肋膜炎となり、肺に水が溜った。湿性胸膜です。無理を

したためでしょう。今でもレントゲン写真を撮ると、昔の影が残り、医者も「良く生きている」と驚く。自分自身でも良く生きていると思う。

入隊の時は日の丸の旗で送られた。自分自身「忠君愛国の精神」になんの疑問を持たずに入隊し軍隊生活を過ごした。現在の若い者には信じられない心境だろうが、私は五十有余年経った今も悔い無い思い出とまっている。これが今の私の心だ。

今年七十五歳で、老齢年金を受けられる。ここまで生きられた。神仏の加護と感謝し人生の幸福を感じています。

—その後の後遺症は。

私は今、自家営業だから、日々は無理せず、妻も食生活で万全を期し注意してくれる。幸せなものであります。子供は男女二人で、共に地元竹原で就職し孫は五人で内孫三人。私たち夫婦、子供夫婦、孫三人、三代、七人の大家族です。友人の子供が都会へ出て出世しても、年寄り淋しい思いをしています。私等は倅と一緒に心丈夫で、これが幸せと喜んでいる。

金は溜めずとも、不自由はしていない。これが現在の心境です。

満州・中支（芷江作戦）従軍記

岩手県 菊地 卯三

―菊地さんは、中支軍の弾兵団だと聞いていましたが、支那事変前に朝鮮で勤務されていたのですか。

私は大正四年十一月十日、胆沢郡の現前沢町古城で生れ、昭和十年徴集兵です。甲種合格により、昭和十年十二月十日、朝鮮羅南の歩兵第七十三連隊に入営したのです。当時、宇垣軍縮の余波でもあつてか、青年学校卒業者は、帰休というのか、兵役期間短縮というのか、昭和十一年六月には満期ということだったので、す。

ところが、私たち第六中隊は師団命令により応急派兵ということで、満州に近い所の茂山守備隊に派遣されたのです。戦闘で二、三人負傷はしたが、敵情は思

つた程悪くはなかつた。

相手は、金日成軍とのこと、その後、奥の三長守備隊を根拠地として、白頭山の北側の方へ行った。山の中に天幕を張って二昼夜ぐらい警備したが何も無く、七月まで警備をしていたが、師団長閣下が臨検に來られ、整列してこれを迎え検閲を受けました。

そのとき、師団長一行を四台のトラックで送つたが、朝鮮国境の豆満江右岸で、四台が転落し佐藤少尉等四人が死に、我々留守部隊は急拠救助に向かった。師団長の車と、護衛車は大丈夫だったが、前後の車が落ちた。死んだ佐藤少尉は初年兵の時の教官であつたので、これが事故扱いか戦死なのかと心配した記憶がありました。私たちは警備を終了、七月末頃羅南へ原隊復帰したので。

応急派兵任務を終えた第六中隊の、我々同年兵は今度こそ満期除隊と喜んでいたのですが、私たち五人の伍長勤務上等兵は引続き臨時召集、伍長任官となり内地帰還はまた延期となつてしまつたのです。

その当時（昭和十二年まで）朝鮮の入営は一年二期、